

平成28年5月24日

会議録を読んで「ため息」が出ます。

改めて、「安平町文化財保護委員会会議録」を読んで思ったのです。

「原状回復が出来ない」って言うのは、間違った判断です。

「木造サイロについて、腐食が進んでおり、現状のまま現地から動かすことは出来ない。また、解体し移動した場合は、原状回復することは出来ない」
(安平町文化財保護委員会会議録 H27・11・24)

この理由は、白河市の石垣修理を見れば、とんでもないことだと思うでしょう。

ワルシャワの旧市街地の復旧の仕事を見たら、そんなこと言えないでしょう。

弘前市の弘前城だって「石垣を一度解体し忠実に再現する」挑戦を続けています。専門家に相談するべきでしたね。「どうしたら保存できるか」と。

そう言われたら、町は、すぐ、今度は「予算」を理由にするのですか？

安平町は、必要も無い議場に1億2千万円をかけているのですよ。

道の駅に8億もかけているのですよ。

町の庁舎にこれまた、4億も5億もかけているのです。

その他、建築関係にずいぶん税金をかけていますね。

町長と教育長とこの問題で話し合った人が言ってました。

「そんな（多額な）お金はどこにあるのか」と言われたと。

その時、「町長よりも、教育長の方から厳しい言い方をされた」とも。

結局は、文化財保護に対する認識の問題です。

私が、町長や教育長だったら、間違いなく、木造サイロは保存されたということです。

「窓枠の落下破損」や「倒壊の恐れ」が、 どうして「文化財の価値を失った」事になるのか。

また、教育委員会は、解体理由を文化財保護条例の7条を引き合いにして次のように言ってます。

『一部破損や腐食状況など総合的に見て、「その文化財の価値を失った場合」に該当するものと判断し本委員会諮問・答申し・・・』

(安平町文化財保護委員会会議録 H27・11・24)

しかし、「一部破損や腐食状況」とは、具体的には、「窓枠の落下破損」や「倒壊の恐れ」
だけです。「総合的に見て」とは、単なる修飾語です。
「文化財の価値を失った」と、断定できる何ものもありません。

白河市の他にも、石垣を一度解体し、忠実に再現する弘前城の改修の取り組みもあります。

工事の面で大きな作業になるのが石垣の解体、そして石垣の再現です。

修理予定範囲は約 1100 平方メートルに上るそうです。

使われている石の数は約 3000 個。その一つ一つに番号を付け、位置を記録し、また同じ
場所に戻さなければならない。・・・そんな作業に取り組んでいます。

「木造サイロ」の解体。・・・やっぱり、情けないとしか言いようがありません。

木造サイロは、「解体せずに済んだはずだ」という私の「広報」への投稿は、却下されてしま
いました。改めて、小峰城址石垣の修復やワルシャワの修復を思うと情けなく思います。
ある町民の方が言いました。「俺だって掲載させないよ。もう、壊したあとだし、責任が
問われるようなことだから」と。確かにそうかも知れません。

「責任逃れ」のための「広報不掲載」ですから、言ってみれば保身の為です。

しかし、今、私は思うのです。

「残すことが出来たはずだ」という私の指摘に対して、「解体を正しい選択だった」と今も、
心の中でも、そう思っているのだろうか。

もし、そうなら、その人達に対して、何らの希望が持てません。

「責任を問われるから、保身に為に、自分の間違いを認められない。しかし、本心では、
間違いだったと思っている」というのなら、まだ、救いようがあります。

物事を客観的に見る理性があるからです。

もし、同じようなことがあったら、今度は、間違わないような努力を多少とも期待が出来る
からです。

**多くの人々が、文化財保護に、どれだけの神経と労力を使っているか。
改めて思います。**

小峰城址石垣の修復

先日、テレビで、東日本大震災（平成 23 年）で崩壊した国史跡・小峰城址（福島県白河
市）石垣の修復作業が放映されていた。

小峰城跡は東日本大震災で 10カ所の石垣が崩れ、築石（つきいし）約 7000 個が落下

したそうです。平成23年年12月から50億円をかけて修復作業が進んでいるとのこと。小峰城跡に50億円の経費がかかるそうだから、熊本城の修復にはどれほどかかるのかと思ってしまう。因みに、小峰城跡の修復には市の呼び掛けに個人や観光客などから1億8000万円以上の寄付金が集まっているとのことだ。

修復のやり方に感心。

感心したのは、費用の話だけではない。その修復のやり方だった。

まず、崩壊前の石垣の写真と、崩れ落ちた石の形を比べ、どこの場所から崩落したのか、位置を確かめることから始めていたのだ。石には、番号が打たれていた。そして、1つ1つ積んでいくのだ。実に辛抱強く修復作業を行っていた。

ワルシャワ（旧市街地の復興）

テレビを見ながら、ワルシャワ（ポーランド）の旧市街地の復興を思い出した。

私たち夫婦は、丁度2年前の平成26年5月28日、アウシュビッツ見学の後、ワルシャワに入った。そこで、耳にしていた復興した「旧市街地」の見学をしたが、これは復興と言っても、ただの「復興」ではなかった。

ナチスによる都市の破壊

ご承知の通り、ポーランドは第二次世界大戦でナチス・ドイツの侵略を受けます。

ナチス・ドイツの爆撃と火炎放射による破壊活動によってワルシャワの街の80パーセント以上が瓦礫と化したそうです。そしてワルシャワ市民たちが立ち上がったいわゆる「ワルシャワ蜂起」の最後の砦となった「旧市街一帯」は、徹底的に破壊されました。

ワルシャワ市民による復興

しかし、戦後、ワルシャワ市民たちは旧市街の街並を昔の姿のままに再建する事を始めます。市民たちは、残されていた市街のスケッチを手がかりに、瓦礫の山となってしまった一つ一つの建物を「レンガの割れ目一つに至るまで」忠実に再現したのだそうです。これには、ワルシャワの多くの一般市民が参加し、戦後何年もの時間をかけて驚くほど丹念に進められ、戦前と変わらぬワルシャワの「旧市街」が蘇ったと言われています。その後、ワルシャワは、世界遺産になりました。それは、「街の復興にかける市民の不屈の熱意」を評価してのことです。